新制作

SHINSEISAKU

国立新美術館

2016.9.14 - 9.26

Vol.72 / 2016

冬号

新制作協会　広報誌

vol.72

審査陳列報告
一居 孝明・大西 康彦・雨山 智子

企画・展示報告
山口 都・永津 守・野口 育郎

思い出
澄川 喜一

第80回記念展企画について
渡辺 尋志

“新” 制作をめざして
杉本 準一郎

新会員紹介

情に棹させば流される 日々雑感
西田 周司

新制作は「新しい」
本江 邦夫

審査陳列報告

■絵画部

一居 孝明

今回、新制作展が第80回記念展となった。80回の区切りにふさわしく、「新たな可能性に・・・」というテーマのもと、9月2日、3日の2日間において審査を実施した。審査の冒頭に協会委員長から「品良く、美しい展覧会になることを願う」という言葉があった。

絵画部では、今回、従来のデータ画像審査部門に加え、作品サイズによる3つのカテゴリーに分けて公募をした。初めての募集の仕方であり、どのくらいの応募数があるのかが予想しにくかったが、搬入者数400名、搬入点数930点で昨年に比べ7名の増加となった。

3つのカテゴリーに分けての公募にしたことから、それぞれのサイズに応募された意味を重視し、公平な審査ができるよう、カテゴリー別の審査をした。そのサイズでしか表現出来ないような良い作品を積極的に選んでいこうという事が了承され、厳正公正な審査の結果、314名を入選とした。そのうち42名が初入選であった。入選者から2名の新会員、1名の第80回記念賞、10名の新作家賞、8名の絵画部賞、1名の損保ジャパン日本興亜美術財団賞を選出した。また、2点入選者は22名で、昨年より15名減となった。

陳列に関しては、第80回展を記念した3部合同展示が加わったことと、昨年に比べ入選点数が31点の増ということもあり、展示スペースをどう工夫するか頭を悩ませたが、今回も新制作絵画部の伝統ともいえる1段掛けと、委員長の言葉にあった品のある美しい展示を念頭において進めていった。作品サイズによる強さが鑑賞の邪魔をしないよう、それぞれのカテゴリーのサイズの良さが引き立つような展示を目指した。

カテゴリー別の公募方法は今後も続くと思われる。今後、各カテゴリーについてその良さがもっと認識されるのではないだろうか。特にカテゴリーⅢという大型部門を設けたことは、迫力ある会場になった。まさに新たな可能性に向かっている印象である。今後の新制作展の勢いがついた第80回記念展であった。

■彫刻部

大西 康彦

第80回記念展の一般公募作品109点の審査を行いました。2日、3日ともに会員60数名の参加があり、入選作品は出席会員の過半数以上の同意で決定しました。審査の方法はA票（入選）、C票（選外）の判断を挙手によって求めます。

嘗てはB票（態度留保）もあったのですが、試行錯誤の末廃止して現行のスタイルに落ち着いているのです。これにより審査の進行はかなり早くなりましたが応募作品に対する評価や各会員の微妙なニュアンスを掬い上げるのにはやや淡白な手法かもしれません。

そんな想いもあってか・・・、彫刻部では昔からC´の制度を採用してきました。通常の採決で落選（C）になった作品に対して再審査を請求できる権利を各会員に認めているのです。とは言っても、一旦決定した全員の判断に異議を唱えるわけですからかなりな勇気と芸術的信念が伴わなければ発議できないことだけは確かです。

審査に特例（C´）を持ち込むことに賛否両論が存在することを認めた上で、彫刻部の審査では多数決の持つ無難さや平均的な行儀のよい作品が選ばれがちな傾向を打破するための一手段として今年も継続したのです。

この制度の対象作品をC´と呼び今回の該当作品は1点でした。全ての通常審査の終了後に発議者と賛同会員2名の「推薦理由」と「芸術論」を聞いた上で再審査を実施し、改めての入選となりました。

果たしてC´で入選したこの作品が、個性的で特異な才能を見逃さないという本来の趣旨に応えて異彩を放ち、展覧会場に不協和音の一つでも生じさせてくれればと願うのです。いずれにしても作品を審査することは応募者の彫刻人生を左右し、ひいては新制作の未来に直結する重要な行為なのだと改めて思ったことでした。最後に数字的な記録を記して報告とします。

応募者 75名（シード作家2名を含む）/ 入選者 65名（内初入選者9名）/ 搬入点数 109点（シード作品3点を含む）/
入選作品 69点（内シード作品3点）/ 複数入選者 2点入選2名、3点入選（内シード作品2点）1名

■スペースデザイン部

雨山 智子

8月後半、会場の模型を前にして事務所で陳列の打ち合わせをするのが、毎年の慣例です。会員出品作品についての情報も考慮して、審査でどのくらいの数の作品を選ぶことができるか見通しを立てます。いよいよ新制作展が近づいてくるのを実感する時です。

第80回記念展の今年は、2日間の搬入受付で、床、壁、宙吊り、野外の一般部門作品が計47点、及びミニアチュール部門作品53点の応募がありました。はじめて100点となる応募を受け、搬入者も91名を数えることができました。

審査は、床作品の応募点数が少ないことを問題としながらも、様々な素材や技法を駆使して空間への提案を試みる作品に向き合い、進められました。一般部門29点、ミニアチュール部門22点の入選が決まりました。近年ミニアチュール部門の倍率が高くなっていますが、会場構成やスペースデザインのあり方を考えると、現会場で今以上の数のミニアチュール作品を展示するのは難しいと思われます。また、一般部門作品への取り組みがもっと増えてほしいと願っています。

実際の展示については、審査後陳列委員チーフの伊藤哲郎氏のもと、計画が立てられました。今年は、アーカイブス展示を行ったことや休憩室展示がなくなったことにより、決して十分ではない空間を暗室の位置の変更などで有効に使う工夫をしました。そして、陳列日には、一般出品者の方々にも作業に加わっていただき会場づくりをしました。室内では、床、壁作品だけではなく、宙吊りや触れることのできる体験型の作品によって、スペースデザイン部ならではの空間が出来上がります。また、藤本經子氏の遺作展示をはじめ野外展示まで、緩やかに分かれているブースごとに、まとまりのある展示となりました。

若い応募者の減少や、出品継続の難しさ等、課題とすべき点は多々あります。それらを見据えつつ、今後も新たな追求ができる展覧会でありたいと思います。

企画・展示報告

■絵画部

山口 都

第80回記念展では80年前の創立時に立ち返り、各部から選出された若手作家の作品による3部合同の展示室を作りました。これは「新たな可能性に・・・」を掲げた今回の記念展の趣旨に沿ったものです。絵画部では、一般出品者の中から作品を選びました。平面の作品が彫刻部やスペースデザイン部の立体作品と同じ空間に置かれることで作品同士が作用しあい、いつもとは違う新たな化学変化を起こし見慣れた空間とは別の新しさが見られました。

会期中には、この合同展示室に美術評論家の本江邦夫氏をお招きし、ギャラリートークを行いました。ベテラン会員からは各自の新制作への取り組みを、そして同室の出品者と本江氏、各部会員との双方向の意見交換が行われました。若い作家たちの新しい表現への意気込みもさることながら、ベテランの方たちの新たな芸術の可能性にかける若々しい思いも伝わってきました。

会場には例年以上に外国人の姿も多く、絵画部では海外からの出品者の数も昨年を上回る結果となりました。2020東京五輪に向けてこの傾向はさらに顕著になることと思われます。

昨年に続き3部合同企画の「子ども・アート・しんせいさく」、初日のオープントーク、そしてギャラリートークも会員と出品者の貴重な交流の場として、盛況のうちに執り行われました。

■彫刻部

永津 守

第80回記念展では企画委員会の方を中心に色々な企画が行われました。彫刻部独自のものとしては会員のデッサン展があります。第2展示室突き当たりの壁に小品のデッサンを掛けたものですが、例年と展示風景が変わり、それが違和感なく彫刻空間の中にあったという感じがしてよかったのではないかと思います。

3部合同では1階のアーカイブス展示と2階の合同展示、そこでの17日の合同ギャラリートークがありました。彫刻部は3名の若手会員の作品展示とギャラリートークでの先輩会員、山縣壽夫氏と石松豊秋副委員長とのお話がありました。お二人の若いころの話には初めて聞く事が多く、普段はお話しにならない特別な話を伺えた事は若手の作家達にとって新鮮だったのではないかと思います。またこの合同ギャラリートークには多摩美術大学教授・美術史学者の本江邦夫氏をお招きし、講演をいただきました。若手作家への応援とともに、新制作への的確なご指摘もいただき、特にその中で「新制作の価値をもっと積極的に社会に伝える努力をすべきである」と言われたのは核心をついたご意見だと感じました。1階のアーカイブス展示でおよそ40～50年前のポスターの中にスポンサー名や東京オリンピック協賛との掲載のあったものが何枚かありましたが、創立会員を中心として本江氏の言われるような対社会的な活動がかつてあった事を知る事が出来たのは第80回記念展の大きな意義であったと思われます。

■スペースデザイン部

野口 育郎

今回の第80回記念展で、SD部のレクチャーも7回目を迎えました。

9月17日土曜日、国立新美術館 3階研修室において、今村敬子さん岡本泰子さん、2人のテキスタイルデザイナーを迎えて、「テキスタイルで空間をデザインする －いきものの居る空間－」をテーマに、画像を交え話して頂きました。

作家としてのルーツや、作品制作に於ける実験、手法や苦労話等、裏話等も含め非常に興味深いお話を聞くことが出来ました。レクチャー終了後、スペースデザイン部展示会場にて、来場者と出品者とのフリートークの時間を持ちました。作品の魅力等について自由に語り合えた、有意義な時間であったと思います。

今後も、スペースデザイン部の特徴を生かした、展示や企画を心掛けたいと思います。

思い出

彫刻部会員　澄川 喜一

1956年私が藝大を卒業した頃のお話しです。公募展の中では新制作は日本画（後に創画会）、油絵、彫刻、建築の四部門があり錚々たる会員が揃っておられ、他会の中でも新鮮な作品が多く、是非応募したいと思い、未熟なトルソの石膏像を出品し初入選した時のことです。

上野の東京都美術館の一階の大きな彫刻展会場の一部に建築の先生方の建築模型が美しく展示されていました。私の作品は壁ぎわの植木の影に美しくないトルソが展示されていました。あまりにも場違いで、とても恥ずかしく、すぐに持って帰りたかった事を思い出します。

その頃の新制作展の会場はとてもモダンで美しい展示が評判でした。翌年頭部のブロンズ像を出品、新作家賞を受賞することが出来ました。その後何年か経ち木彫を始めて次第に単純な形を造り始めました。先輩の土谷武さんや数人が抽象的な作品を発表するようになりました。

ある時受賞した頭部の具象作品を憶えていて下さった舟越先生と柳原先生が「君は具象彫刻を続けるべきだ」とおっしゃったことを記憶しています。土谷さんも同じ事を云われたと聞きました。土谷先輩は具象の名人でした。道を究めるのは難しいことで、果てし無いことと思うこの頃です。

「そりのあるかたち」と云うタイトルで発表し始めた時、油絵の小磯先生がタイトルと作品のかたちが合っていて解かり易く、ひらがながいいですねと褒めて下さいました。油絵の会員との温かい交流があった頃です。

1993年ニューヨークの高島屋さんで「そりのあるかたち」展を開くことになりました。「至高のダイナミズム」と云う題でジャネット・コプロスさんが私のアトリエまでアメリカから訪ねて来られ取材して頂きました。「そりのあるかたち」と Curving Form の違いを話し合いました。

日本には反り（そり）と起り（むくり）と云う曲線があること、日本刀の切刃を上にして飾れば起（むく）りのかたち、切刃を下にして飾ればそりのあるかたち。例えば人間関係でもあの人はそりが合うとか合わないと云う「形」を表現するような、微妙な味わいの深さがある、ことなど話しはつきませんでした。

展覧会場では Curving Form の下に SORINO ARUKATACHI と併記することになりました。お陰様でストライキングスカルプチャーと好評を頂きました。

80回を迎えた新制作展は私にとっては1年間の勉強の成果を発表する大切な場であり、又、反省の場であると共に永年に渡って育ててもらった場と感謝しております。これからも若手が育つ刺激の場になって欲しいと思います。

彫刻は立体です。会場に立つ作品は作者自身が全裸姿で立ちつくす場です。見られたく無いところもあり恥ずかしい限りですが。例年の新制作展は単なる文化祭ではありません。出品者全員がプロの戦いの場と思います。

今は亡き大先輩の佐藤忠良先生や舟越先生、菊池先生達は常に新鮮で魅力たっぷりの具象形態の新作を毎年出品され続けました。新制作の大きな魅力の柱でした。

新制作と云う切磋琢磨の場が発展することを念じています。

第 23 回　新作家賞受賞作「S 君」

― 第80回記念新制作展受賞者 ―

［ 新制作協会賞 ］

■ 彫刻部
北島 一夫

［ 第80回記念賞 ］

■ 絵画部
蛭田 美保子

■ 彫刻部
小松 俊介

■ スペースデザイン部
おおひら よしこ

［ 新作家賞 ］

■ 絵画部（10名）
緒方 和美 / 甲斐 美奈子 / 柿原 康伸 / 杉谷 俊一 / 大道寺 里子 / 竹本 義子 / 塚崎 聖子 / 原元 鼓 / 丸尾 宏一 / 和田 和子

■ 彫刻部（5名）
小川原 隆太 / 加藤 有造 / 香取 宏幸 / 小柳 順 / 田島 亨央己

■ スペースデザイン部（4名）
野口 真理 / 馬場 拓也 / 深尾 雅子 / 福島 夕貴

［ 絵画部賞 ］（8名）

阿部 洋子 / 桜岡 みゆき / 蕎麦谷 慶子 / 田中 直子 / 仲田 道子 / 藤田 憲一 / 森 愛子 / 渡辺 有葵

［ 損保ジャパン日本興亜美術財団賞 ］

丸山 宏

第80回記念展企画について

彫刻部会員　渡辺 尋志

第80回記念新制作展として三部合同展示には彫刻部若手会員から、江村、木方、森の3氏が作品を出品した。通常は作品を展示する場所の壁面に色彩はないためこの三部合同展示は結構な冒険であろう。しかし、三作品ともに空間の雰囲気と壁面の色にも影響を受けることなく作品本来の存在を主張していた。彫刻部とSD 部の入り口に設けたアーカイブ展示は80回分のポスターからスポンサー名の入ったものや東京オリンピック時のものなど珍しいものを展示した。協会に保存されていたスナップ写真から1952～1997年の80枚をスライドショーで映写した。懐かしい映像に時間をかけて見入る方も多く見られた。

彫刻部としては一階展示室奥の壁面に希望会員によるデッサン展示がされた。立体作家の平面表現はめったに見られないということもあり、目を奪われる観覧者も多く、次回の展示を期待したいという意見を頂戴した。

また、一昨年より試行してきた受賞者、新会員のキャプション添付の QR コードでの作家コメントの表記を、今回会員全員に拡大したいと呼びかけ希望者五十名の参加となった。スマートフォン等で読み取れるが、その環境のない方のために QR コードの内容を印刷したコメント集≪作家のひとりごと≫を作り、入口のチケットカウンターに配置した。作品についての余分な説明は必要ないという作家もいるが、この作家側から見る側への優しいアプローチは幾人もの観覧者からとても良い反応を得ている。今後、継続できるよう働きかけたい。

アーカイブ展示風景

佐野ぬい委員長

新制作協会賞・第80回記念賞 受賞者

彫刻部
新制作協会賞
北島 一夫
「萌 – 黄金比について –」

絵画部
第80回記念賞
蛭田 美保子
「光来フラガンシア」

彫刻部
第80回記念賞
小松 俊介
「低く浮かぶ　静かに膨らむ」

スペースデザイン部
第80回記念賞
おおひら よしこ
「Noa」

『賞 牌』

第80回記念賞受賞者に委員長・佐野ぬい氏自筆の賞牌が贈られました。

絵画部
「青の時間」油彩 14×18cm

彫刻部
「過ぎた日」油彩 14×18cm

スペースデザイン部
「形の記憶」油彩 14×18cm

“新” 制作をめざして

彫刻部会員　杉本 準一郎

アーカイブ展示風景

彫刻部デッサン展示風景

「子ども・アート・しんせいさく」実施風景

知らない土地で、芸術や、歴史の繰り返しを学ぶ事を通じて右往左往しながら互いに励ましを得る友人を探している。安心とか納得の合図を頼りに勇気を湧かせる。1 枚のシンポジウム招待状はそんな始まりです。ずーっと続いている私の制作風景です。

新制作に発表したのは48年も前の事です。上野では多くの芸術家の生き方、表現の熱が次々と迎えてくれた。表現の喜びの出発は東京へ足を運ぶ事からであった。そして今も？世界は今はとても広いし私達の歩幅も格段の変化を手に入れている。一面興奮だけが溢れて上滑りも枚挙にいとまがない。学生時代の頃、新制作へ出品の経歴を持つ故・水井康雄氏からの東欧での彫刻シンポジウムの写真年賀状を拝見した事を鮮明に覚えています。こんな事もあり1970年頃よりの愛知県常滑での野外彫刻展の“世界へ”そしてシンポジウムの展開に歩みを始めました。新制作と“新”制作の両輪です。

バンクーバー・常滑・琵琶湖・内海・内海・豊明・犬山・南相木・常滑・常滑・デリー・カトマンズ・関ヶ原・トロント・常滑・ヘタウダ・湖南・ポカラ・本年のイタハリと繋がり、続いていきます。新しい友人が現れ、新しい彫刻家が生まれ、新しく芸術の力を信じる人達が楽しい空間を創出してくれます。さあ次はケニヤでもアルゼンチンでもと「純粋芸術の責任と新しい芸術家の結合」を夢みて！と思っています。

シンポジウムの実現には本当に多くの支援者があっての事でした。新制作の作家の方々にも参加を含め多大の力添えを頂きました。

さあ次へつぎへ !!

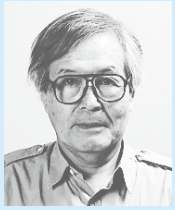
2016.2 イタハリ国際彫刻シンポジウム（ネパール）にて

訃 報　（平成28年10月末現在）

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

山内 秀臣 氏
絵画部会員

平成 28 年 5 月 21 日逝去
（享年 86 才）

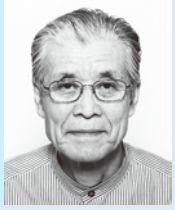


藤本 經子 氏
SD部会員

平成 28 年 6 月 29 日逝去
（享年 89 才）

伊藤 茂擴 氏
絵画部会員

平成 28 年 8 月 9 日逝去
（享年 81 才）



田幸 稲 氏
絵画部会員

平成 28 年 10 月 10 日逝去
（享年 91 才）

受賞作家展　開催のご案内

■ 絵画部

2017年1月16日(月) ～ 1月21日 (土)
11:00 - 19:00
[初日] 13 : 00 ～　[最終日] 18 : 00 終了

会場：銀座井上画廊
中央区銀座 3-5-6 井上商会ビル3F（松屋前）
TEL. 03-3562-1911

● オープニングセレモニー：1/16 (月) 17:00–18:00
● オープニングパーティ：　1/16 (月) 18:00–20:00
会場…「えん」銀座店 / TEL. 03-3538-5496

■ 彫刻部

2017年2月6日 (月) ～ 2月17日 (金)
11:00 - 18:30
[最終日] 16 : 00 終了
[休廊日] 2月11日 (祝)、2月12日 (日)

会場：ギャラリーせいほう
中央区銀座8-10-7
TEL. 03-3573-2468

● オープニングパーティ：2/6 (月) 17:00–18:00

■ スペースデザイン部

2017年2月5日 (日) ～ 2月10日 (金)
10:00 - 18:30
[初日] 13 : 00 ～　[最終日] 17 : 00 終了

会場：建築会館ギャラリー
港区芝5-26-20
TEL. 03-3456-2051

● オープニングパーティ：2/5 (日) 17:00–19:00

新会員紹介

絵画部

おくやま　くみこ
奥山 久美子

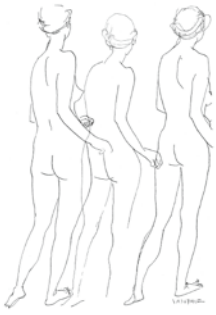
植物の強さ、面白さ、美しさにひかれ絵画として表現できたらと、制作を続けてまいりました。新制作での先生方、先輩方のアドバイスや励ましを戴き、多くのことを勉強させていただきました。感謝しております。これからも真摯に作品を制作していきたいと思っております。

◆ 1944年東京都生まれ。
1964年桑沢デザイン研究所修了。
1997年第61回新制作展初入選。
第78回、第79回新制作展新作家賞受賞。

やなぎ　ちよこ
柳 千代子

長い間、会員の先生方は私の作品の推移をご覧になっておられ甚く感激致しました。賞を頂き、会員になり、先生方からお声をかけて頂き、心配して下さっていたことに改めてお礼申し上げます。創立会員の小磯先生、三田康先生、創立を外から応援された竹田道太郎先生は鬼籍に入られましたが、諸先輩の先生のお導きを得てこれから精進致しますので天国から見守ってください。

◆ 1942年兵庫県生まれ。
1965年女子美術大学芸術学部洋画科卒。
1967年東京芸術大学大学院油画専攻小磯教室修了。1966年第30回新制作展初入選。
第69回新制作展新作家賞受賞。



彫刻部

おおの　りょういち
大野 良一

よもや会員になれるとは思ってもいませんでした。地方からの出品で、中央での力試しだと考え、入選する事を喜びとして出品して来ましたが、数年前から自縛を解いて、自由で身軽になって彫刻を見直してみようと心掛けた事が、今回の結果につながったと思います。本当に力あっての事ではないように思いますが、足手まといにならないよう、頑張る所存です。

◆ 1949年高知県生まれ。
1971年九州産業大学美術学科卒業。
1989年第53回新制作展初入選。
第78回、第79回新制作展新作家賞受賞。

はまだ　たくじ
濱田 卓二

初めての出品から雲を掴むような制作の日々が流れ、今夏ひとつの読点が打たれたように思えます。自己を見つめ、自然を感じ、恩師をはじめとする先生方から教えて頂いた彫刻の深さを真摯に追究していきたいと思います。

◆ 1984年京都府生まれ。
2006年第70回新制作展初入選。
2009年金沢美術工芸大学修士課程彫刻専攻修了。第77回、第78回新制作展新作家賞受賞。

まつえだ　げんたろう
松枝 源太郎

私にとって新制作は、数々の洗練された作品と並べることができ、自分を客観的にみつめられる貴重な場です。様々な形で協力していただいた方々に感謝し、これからは会員として自分の彫刻を深く追求していく所存です。

◆ 1979年福岡県生まれ。
2002年東京造形大学彫刻科卒業。
2002年第66回新制作展初入選。
第77回、第79回新制作展新作家賞受賞。

スペースデザイン部

たかまつ　けいこ
高松 恵子

私は、1985年より23年間、ドレス及び、パリコレクションのショー製品の縫製をしてまいりました。その技術と感性に拘り、新しく、ワクワクできる作品制作を目標としてまいりました。常に、継続は力なり！この言葉を糧として、15年間新制作展に出品させて戴きました。推挙して戴いたことには、気恥ずかしさと不安がありますが、今まで以上に精進する覚悟でございます。

◆ 1951年茨城県生まれ。
2002年第66回新制作展初入選。
第73回、第75回新制作展新作家賞受賞。

なかそね　きよこ
中曽根 清子

私はバティックの手法で染めの作品を制作してまいりました。会の一員として気持ちを引き締め作品制作に精進してまいります。

◆ 1943年香川県生まれ。
1964年女子美術大学短期大学部造形美術科卒。
1992年第56回新制作展初入選。
第78回、第79回新制作展新作家賞受賞。

『賞 牌』

第80回記念展の新制作協会賞ならびに新作家賞の受賞者に贈られました。

「少女」笹戸 千津子
ブロンズ　12×12×1 ㎝

新制作

情に棹させば流される　日々雑感

絵画部会員　西田 周司

新制作協会が発足して早いもので80年が経過しました。もちろん強く印象に残っているのは44年前の初出品の時で、猪熊弦一郎先生がニューヨークのアトリエを引き払って日本に帰ってこられた時と記憶しています。握手していただきながら「頑張りなさいね」と言って頂いた事と、20年後会員になったのですが、会員証を手渡しながら「これからは若い人が頑張ってくださいね」と言われ、卒寿の会でも遠くからの参加のお礼と共に同じことを言われました。中学生の時山口薫に憧れて絵を描き出したのですが、猪熊、脇田両先生の新制作も憧れでしたので、その後絵を続けていく糧にもなりました。僕にとって直接絵で影響を受けたという事はむしろ表面的にはなくて、深く感銘を受けたのは絵画に対する純粋な姿勢だった様に思います。そう、今では恥ずかしくて中々言えないような純粋という言葉が似合う方でもありました。80年経った今でも新制作は権威を持たない純粋で公平な自由を追求していると思います。まだ若かった創立会員の精神が未だに宿っているようです。でも何か不安です。今の絵画が少し立派すぎるようにも思います。創立当時はアロハシャツを着たと揶揄された軽薄なぐらい新しモノ好きの精神がありました。時間が経つとアロハシャツを着た精神は段々密度と風格に変わるようです。自由な精神が少し遠のき、より完成度のある作品が増えました。自分の事を棚に上げて申し訳ありませんが、より厳しくいうと新しいものに挑戦する勇気よりも、より深く自身を掘り下げる事のみに興味が行っている様に感じます。それは大切な事では有るんですが皆が皆そうなるのはどうでしょうか。猪熊先生がいつも「絵を描くには勇気がいる」とおっしゃっていましたが、それは挑戦する勇気だと思います。会の発足当時は創立会員も若く、それから年齢を重ね体制もしっかりして来ると、僅かな変革でもはるかに大変な時代に成ったと思いますが、体制を整えながらもそれに囚われずに破壊さえするのは作家の使命でもあります。幸い執行部の多くの試行錯誤の結果、データ審査の中から若い世代の台頭もありますので将来に少しは希望が持てます。自分自身の制作も含め、いつまでも創立会員の精神に頼らずとも変革の気持ちを持って、より多様性の有る絵画に挑戦していきたいと思っています。

私は、作家は熟考が介入する事のできない直接的な手法を用いて、手とのコミュニケーションによりそれ自身を表現させるという原則を強く信じるものです。近年は体調も中々安定せず自由気儘に制作出来ない日が多いので、その分出来るだけ短期間で制作が終わる様努力していました。つまり集中力が切れる前に仕上げたいという事です。特に昨年事情があって絵が描ける様になったのが8月10日になってからで、30日には運送屋が引き取りに来ます。その2ヶ月前から全く絵が描ける状態ではなかったので、一時は今年の出品を諦めようかと思った時期も有りました。しかし気をとり直して出品を目指して描き始めました。初めはダラダラと地塗りなどをしていましたが、何のイメージも湧かなかったのがそのまま描き続けていると1週間で120号が何の意図もないままですが仕上がっていました。勿論只塗っているだけですので描き込みのない薄っぺらい絵なんですが、微妙に動きが感じられて、色も何回も塗りこんでいないので意外と綺麗に見えました。もう1枚も1週間で仕上がり、二つを繋げて昨年の大きな出品作になりました。追い詰められていたという事も有りましたが何の意図も無かったのが幸いし、むしろ深層の普段は見えない形が急に現れた様でした。感覚だけで仕上がったこの絵が妙に気に掛かり出しました。表現の事、作品が強い、弱いという事、意図が有るか無いか等々絵画について考えさせられました。それまでにも新制作に出品する自分の作品の表現の方法について色々熟考していたと思っていましたが、結局は自身の至らなさに行き着いて、一生懸命制作しなければという結論に落ち着いていたんですね。それなりに色々試行錯誤を重ねてきましたが、感覚だけでも絵が描けたという事実は、そういうセンスは作家の大切な要素かも知れないと考える様に成りました。昨年の絵が時間が経つにつれ段々と気に入ると同時に、これが

「走れメロス」Kuru, Melos! 2013 / 西田周司　表紙

今まで深層の中に隠れていた自身の表現ではないかと思う様にもなりました。色々な条件が重なって偶然出来た事は間違いありません。その後9月になってグループ展に50号を2点出品するので描き始めたんですが、ああしようこうしようと、今までと違ってむしろ意図が邪魔をして中々絵が進まない有様でした。今は仕事も辞めて自由な時間に恵まれ、50数年来収集していたレコード三昧の日々を過ごしています。本当は音楽を聴きながら絵を描きたいのですが（じっくり音楽を聴く時間がなかったのでそういう習慣がついたのでしょう）絵は体調次第なので音楽だけの時も多くなっています。

今は1920年代、30年代（本当は SP レコードの復刻 LP レコードを聴く事が多いですが）古い時代の音楽に新しい発見があって楽しいです。音楽産業の黎明期には演奏家のみならず、作曲家や録音技術者達が活気溢れる音源を残しています。1920年代中期の蓄音機の音がその後の LP、CD、ハイレゾを含めてあらゆる時代を通じて、今の再生装置のピークだったと認識する人もいます。あの雑音だらけの蓄音機の音がですよ。でも雑音が有るとか無いとかは音が良いかどうかとは関係ありませんね。新制作絵画部は80年もの長きに渡って本当に上手く慎重に運営してきたと思いますが、それでも80年時間が経って非常なる勇気と思い切りが少し失せた様に感じます。どんなに上手く運営してもこれだけは各作家の問題です。でも新鮮さが欲しいんです。これはこじつけですが、会員も協会が発起した時代と年齢に戻ると黎明期には全てがうまく回るそうですから、そういう気持ちに戻ってイメージを働かせれば、まだまだ可能性が有るように思います。だって古いレコードをかければ20年代の音楽なら20年代の音楽の息吹が時代の息吹が雑音の奥から聴こえてきます。しかも何回も何回も再生可能ですよ！

新制作は「新しい」

本江 邦夫

1998年に、それまで勤めていた美術館から美大に移ったその年から、新制作展を定期的に見るようになった。大学の同僚に会員の方々がいらして、案内状等をいただくようになったからである。見だしてみると、ときに因習的なところも見え隠れするが、これがなかなか面白い。その性質上つねに足許の揺らいでいる、いわゆる「現代美術」と比べると、何といっても安定感がある。「現代美術」にしても本当はこの安定感に根ざした反撥であり、新潮流であるべきである。さもないと、養分の恒常的な供給がないのだから、やがて立ち枯れてしまう。実際、はっきり言って「現代美術」―かつてはそれなりに輝いていたこの言葉は今や死語となりつつあり、美大のアトリエでも影が薄い。

なかなか面白いとは言ったが、これはある種の勘のようなものなので、その実態を正確に述べることは難しい。それでも、たとえば独立展と比べると、「傾向」の際立ちが希薄で、「けれん味」を排した実直な姿勢に好感がもてると言えるだろう。出品者のヒエラルキーを感じさせないようにしているのも適切な措置だと思う。むろん問題がないわけではない。

これは団体展全般について、実は深い根拠もなく言われていることだが、新制作にしても複雑怪奇な現代社会の変化についていけず、若い才能を取りこぼしているかもしれない、ということだ。これを恐れて、若者たちにたいして特別な配慮を見せる団体が増えてきているのは事実である。しかし、私はこうした「飴と鞭」の飴的対応が功を奏するかどうかは疑問だと思う。そもそも、我が国の団体展はもともと、意識の高い有志たちの研究会から出発していることを忘れてはならない。重要なのは、同じ問題を共有する者たちの切磋琢磨の「場」であることであり、入賞とか昇格はまた別の話だ。この辺を曖昧にするから、「賞を貰ったとたん辞めてしまう」（との愚痴をよく聞く）新人たちが多いのである。

団体展が果たして本当に時代遅れかどうかも、簡単には言えないことである。今回、新制作展80回記念の、各科の新鋭をよりすぐった合同展示の講評会に参加させていただき、少なくとも私はその感を深めた。全体として、きわめて現代的であり、実際、和田和子（敬称略、以下同様）のように大規模な公募展 FACE の受賞者もいる。鈴木夢美の読売アンパン的な廃物絵画が黒々と精彩を放っていたのも新鮮だった。柴田貴史、山口蒼平、渡辺有葵など、私が長年かかわってきているシェル美術賞の最終審査の雰囲気である。とはいえ、いちばん面白かったのは、彫刻の二人―江村忠彦（乾漆）と木方立樹（木彫）をめぐる、重鎮の会員たちとの、互いに安直に妥協しようとしない意見交換だったかもしれない。もっと若者たちの言い分を認めてやればいいのに、と思う反面、いや「飴」ばかりでは育つものも育たない、と考え直し、私自身がとても勉強になった。こういう真摯な講評会を、もっと一般に開いて毎年開催し、ウェブサイトでも目立つようにしていけば、新制作はいつまでも「新しい」と思う。

もとえ・くにお

美術史学者　多摩美術大学教授

東京大学大学院西洋美術史専攻を修了したのち、国立美術館勤務を経て、マチス、ゴーギャン、ピカソ、ルドンなどの回顧展を手がける一方、辰野登恵子などの現代作家にも造詣が深く、府中美術館館長や若手発掘の様々なコンクールの審査員として幅広く活躍。
98年より多摩美術大学教授。

入場者数

第80回記念新制作展の入場者数は、全日程合計:47,219人(無料・一般有料入場者合計)でした。

巡回展

○ 京都展
10月11日～10月23日 (10/17 休館日)
京都市美術館
○ 名古屋展
11月22日～11月27日
愛知芸術文化センター 8Fギャラリー
○ 広島展
12月6日～12月11日
広島県立美術館 県民ギャラリー

新協友

【絵画部】
置鮎 早智枝、塚崎 聖子、野村 忠夫、母倉 信恵、原元 鼓、蛭田 美保子、丸尾 宏一、脇本 イサヲ、和田 和子

【彫刻部】
加藤 有造、北島 一夫

【SD部】
おおひら よしこ、馬場 拓也、深尾 雅子、福島 夕貴

彫刻部シード作家

受賞者の中から翌年無審査で本展に出品できる作家を選びました。今年は、加藤有造さん、香取宏幸さん、田島享央己さんの3人です。

第81回新制作展の開催案内

開催期間:平成29年9月20日(水)～10月2日(月)
搬入受付:平成29年9月6日(水)、9月7日(木)

第80回記念展授賞式(国立新美術館講堂)

第80回記念展祝賀会(大手町サンケイプラザホール)

京都展 展示風景

《物故会員 展覧会情報》

●7月18日～7月30日の期間、うしお画廊にて故・山内秀臣氏の展覧会「追悼 山内秀臣展」が開催されました。

●8月20日～10月10日の期間、古川美術館にて故・加藤金一郎氏と故・丹羽和子氏の展覧会「加藤金一郎と丹羽和子 -絵は人生-」が開催されました。

●9月29日～10月25日の期間、国営昭和記念公園花みどり文化センターにて展覧会「第3回花とみどり・いのちと心」が開催され、故・渡辺隆根氏の作品が出品されました。

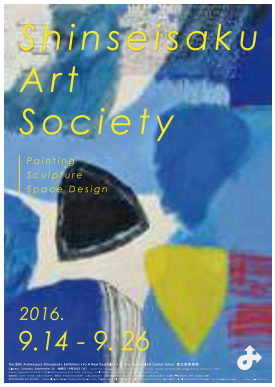
●10月22日～12月18日の期間、長泉院付属現代彫刻美術館にて故・鈴木武右衛門氏の展覧会「PASSIONE -鈴木武右衛門展-」が開催されました。

《伝言板》

● 図録のバックナンバーについて
引き続き寄贈可能の号がありましたら、皆様ぜひご協力をお願いいたします。

編集後記

広報誌Vol.72号をお届けします。編集にあたり取材、ご寄稿下さいました皆様には、この場を借りてお礼申し上げます。
80年の節目の展覧会が終了し、さらなる未来に向かう第一歩が始まりました。
広報委員会では広報誌やHPを通じ、ご協力ご支援をいただいている方々、出品されている多くの世代の皆様方に新制作の情報と魅力をお伝えして参ります。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(関水)



第80回記念展英語版ポスター

新制作協会

〒160-0022
東京都新宿区新宿 6-28-10 大阪屋ビル202
Tel:03-6233-7008 Fax:03-6233-7009
URL:http://www.shinseisaku.net/
E-mail:webmaster@shinseisaku.net
発 行 / 新制作協会
企画・編集・制作 / 広報委員会広報誌編集委員
千葉 文隆、関水 英司、田中 直子、
岩間 弘、宇多 花織、中野 威
監 修 / 佐野 ぬい
発行日 / 2016年12月

＊広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批判、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務所迄ご連絡ください。